

ことばを蓄え、ことばを生かす国語教室の創造 ～学習の見通しをもち、論理的に読む力をつける説明的文章の指導～

1 研究のねらい

都城市・三股町における生徒の意識や実態を把握するために、すべての中学生を対象にアンケートをとったところ、「文学的文章」に比べて「説明的文章」に苦手意識をもっている生徒が多いことが分かった。なぜ、説明的文章を苦手と感じるのかという質問の回答から、「学習の見通しがもてない」、「専門用語や難しい言葉につまずきや抵抗がある」という二つの課題を見出した。また、各学校の教師からは「語彙の意味が理解できず、内容理解に困難をきたしている」「習得させた語彙や学習用語を確実に定着させることが難しい」など、読解や思考の基礎となる「語彙」に関する課題が多く挙げられた。このような実態から、それぞれの課題を解決するために「学習の見通しをもたせる」「基礎となる語彙力を意識的に身に付けさせる」「習得した語彙を活用する言語活動の場を設ける」という三つの柱で研究を実践してきた。

2 研究の内容（実施 第1学年・第2学年）

(1) 学習の見通しをもたせる

生徒に学習の見通しをもたせるためには、学習の目標や内容を明確にもつ必要がある。個々の教師がそれを意識して授業に臨めば、生徒はこの授業で何を学ぶのかというゴールイメージをもつことができると考えた。学習の見通しをもつことは、教える側からも、生徒の側からも大切なことである。

① 第1学年「オオカミを見る目」

単元全体を見通して、1時間1時間の授業をどのように展開するか、教師が単元全体の構想を練っておくことが必要である。そこで、授業内容の詳細や評価規準をまとめた「単元構想表」を作成した。また、「単元構想表」を簡潔に模造紙にまとめた「学習の流れ」を授業の始めに提示した。

② 第2学年「食の世界遺産－鯉節」

単元全体を見通した「学習活動一覧表」を模造紙にまとめ、毎時間授業の始めに提示し、学習内容を確認しながら授業を進めた。

(2) 基礎となる語彙力を意識的に身に付けさせる

「基礎となる語彙」とは、「蓄えたい語彙」と「蓄えたい学習用語」の2種類を表す。語彙力は、理解や表現の土台となるものである。文章の中で使われている語句の意味を正しく捉えたり、語彙を増やしたりすることが言葉の力を育て、また、文章を読み解くときや表現するときに必要な技能としての言葉（学習用語）を習得すれば、論理的に文章を読み取る力が身に付くのではないかと考えた。そこで、基礎となる語彙力を意識的に身に付けさせる場を設定する取組を行った。

① 第1学年「オオカミを見る目」

ア 「蓄えたい語彙」・・・語句の意味を辞書で調べさせた。

「イメージ」「影響」「実際」「象徴」「糧」「襲撃」「策を講じる」「軸」「基盤」「心血を注ぐ」「したがって」「撲滅」「迫害」「手のひらを返す」「獐狂」「一変する」「つまましい」等。

イ 「蓄えたい学習用語」について

本単元では、文章構成に注目し、各段落の関係について学んだ後、目的に応じて要約する活動に取り組んだ。要約のスキルを身に付けさせるために必要な語句を「蓄えたい学習用語」と

設定して、グループごとに要約を行った。そして、要約のスキルを確実に身に付けさせるために、グループで要約文をまとめた後に、個人で目的に応じて要約する場を設定した。

【蓄えたい学習用語】～「要約」「キーワード」「筆者の主張」「接続詞」「具体例」「事実描写」「文体」「常体」等。

② 第2学年「食の世界遺産－鯉節」

ア 「蓄えたい語彙」について・・・ 語句の意味を辞書で調べさせた。

「手間暇」「みるみる」「先達」「舌を巻く」「たちどころに」「相乗効果」「がぜん」「三種の神器」「繊細」等

イ 「蓄えたい学習用語」について

本単元では、本文を通読して意味調べを行った後、各形式段落で筆者が何について述べているのか簡潔な文章にまとめ、各段落の関係性を捉えながら、意味段落に分ける活動を行った。文章の構成や段落ごとの関係を捉えるために必要な語句を「蓄えたい学習用語」として設定して、グループごとに話し合い活動を行った。

【蓄えたい学習用語】～「接続詞」「順接」「逆接」「転換」「補足」「筆者の主張」「事実」「まとめ」「問題提起」等。

(3) 習得した語彙を活用する言語活動の場の設定

第2の柱で身に付けた力をさらに深めるためにこの柱を設けた。蓄えたい語彙や学習用語を理解するだけでなく、自分自身の言葉として使えるようになると、自分のものの見方・考え方に生かすことができる。それによって、国語科の授業だけでなく他の教科や日常生活においても論理的に読めるようになると考えた。

① 第1学年「オオカミを見る目」

「筆者の文章のよいところを見つけよう」というテーマで、グループ毎に話し合い活動を行った。生徒たちは、文章構成や各段落の関係に着目しながら、筆者の文章のよさを見つけていた。その際、生徒自身の言葉として、学習用語（「接続詞」「問い」「答え」「主張」「時系列」「比較」等）が話し合いの中で使われていた。

② 第2学年「食の世界遺産－鯉節」

筆者の主張を読み取り、最終的に、自分たちの身近なところで失われつつある伝統や文化に目を向け、守っていきべき伝統文化について、筆者の文章の書き方に着目しながら作文を書かせた。

3 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ① 学ぶ目的を明確にし、学習の見通しをもたせることで、生徒は身に付けたい力を意識しながら、意欲的に取り組めるようになった。
- ② 意味調べを行うことで、生徒は語句の意味を正しくとらえることができ、正確な内容理解につながった。
- ③ 「蓄えたい学習用語」を繰り返し使う場面を意識的に設けることで、用語に対する理解が深まり、説明的文章を論理的に読む力が向上した。
- ④ 習得した語彙を活用する言語活動の場を設けることで、蓄えたい語句や学習用語を自分自身の言葉として使えるようになった。

(2) 今後の課題

- ① 語彙力が十分身に付いていない生徒は、日常生活で触れるさまざまな言葉の語感の違いに気付くことができないので、語彙力を伸ばす手立てをさらに考えていく必要がある。
- ② 学習用語は繰り返し使っていくことで定着するので、1年時から系統性をもたせて計画的に身に付けさせていく必要がある。
- ③ 習得した語彙を活用させる場面において、どのような言語活動を行うのが最も効果的なのかを検討する必要がある。